「道北昭介」について

高鍋町出身で、特に印象に残っているのは、旧制中学校の頃雨の降る中で雨に打たれながら風景画を油で描いておられた場面です。風土をテーマにした抽象作品を制作されました。

「上村次敏」について

昭和三十六年に私は武蔵野美術大学に内地留学をしたのですが、その年に武蔵野美大を卒業し、当時先進の展覧会として注目を集めたシエル美術展に三席入賞をして脚光を浴びました。植物を細密に描いて画面いっぱいを埋めるような作風でした。

ここからは、現存作家の方々を取り上げます。

「坂本正直」について

現役では、県内で最も優れた作家の一人だと思います。自分の信念を貫き通す、絶対に妥協しない心の強さを持った作家です。小さなこともおろそかにしない一つの例として、私が高鍋町立美術館長の時代にライフワークともいうべき三蔵法師シリーズ四十五点を一括寄贈受けました。その中の一点には、三蔵法師がゴビ砂漠を渡った日付が描いてあり、この日付を入れるのに現地に行き月の形を確認してこられたそうです。数あるエピソードの一つです。

「鳥原茂之」について

絵は洒落ていないと駄目だと常々私は思っているのですが、県内の作家で鳥原さんほど洒落た絵が描ける人はいません。作品は鳥原さんの生活そのもので、実にダンディです。

「川越彌録」について

実に器用な方で抽象画だけでなく、しぶい色彩の非常に達者な具象画を描かれます。

「彌勒祐徳」について

独特な表現法でご存知の方もいらっしゃると思います。画面を物で全面埋める方法で土俗的というかプリミティブな世界を構築しています。

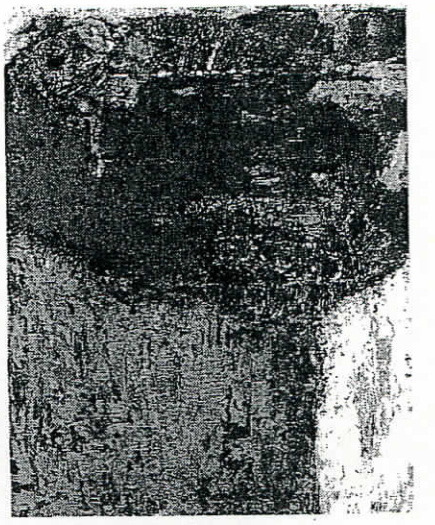
「石井秀隣」について

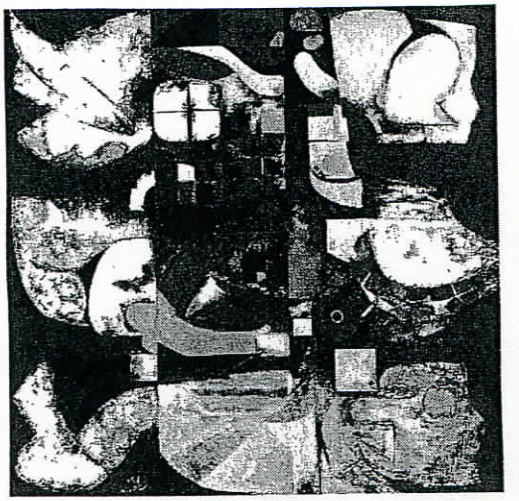
ここからは、私自身の作品です。

牛骨のある静物40F

これは、二十二歳の時の作品で「牛骨のある静物」です。生命の尊さ、美しさ、その永遠性、それを破壊するものへの抵抗を表現しました。この頃は骨ばかりでしたが、その後登場する魚や鳥も私としては生命の象徴として表現しています。

「魚碑」は三十二歳の時の作品で「石になる鳥」シリーズの後に来るものです。飛べなくなって、或いは飛ぶことを禁じられてじっとうずくまって石化してしまう鳥に託した心象風景です。


魚碑50F

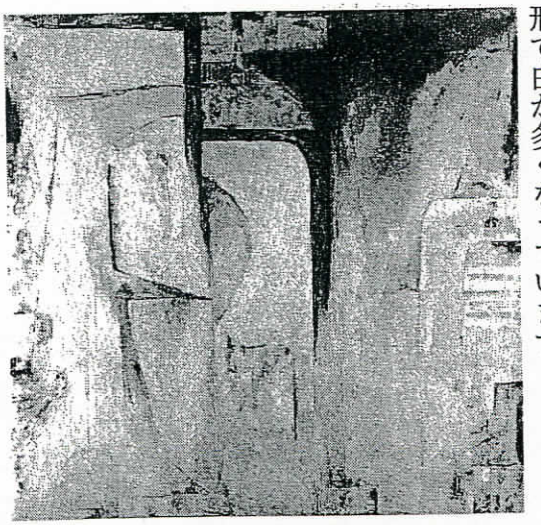

証100S

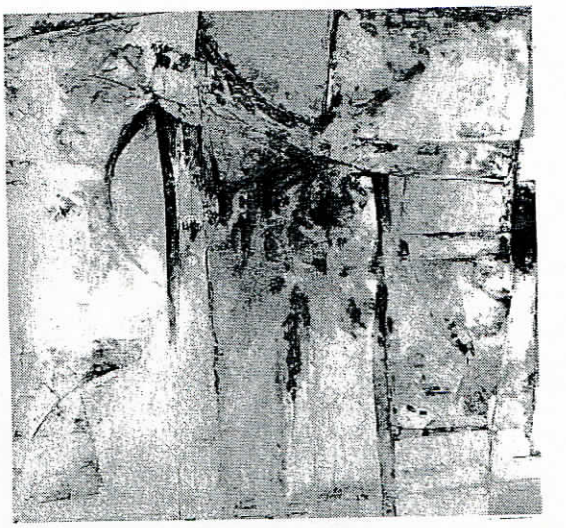
「証」平成十年、「証」平成十一年、六十四・六十五歳の作品でかなり抽象化されつつあります。私はカラーリストを自認していますので色彩は鮮烈です。

「響」平成十三年、「響」平成十四年、六十七・六十八歳の作品で形が大分不定形になりました。私は、絵を描き始めた時にはスタート時分青い絵ばかり描いていました。青の清潔感をだすためにどうしても白の併用が必要なのですが、その頃従だった「白」が表舞台に顔を出すようになりました。

響100S

「遙」平成十八年「兆」平成十九年「兆」平成二十年と益々不定形で白が多くなっています。


兆100S平成19年



兆100S平成19年

兆100F平成19年

私が解釈している「白」は、空白・無の「白」ではなくて全てのものを包含している充実した無限の「白」なのです。最近の私の作品から色が無くなったと言う人がいますが、私自身としては実に豊富な色彩をこの中に表現しているのです。これが現在の私の作品の特徴です。

参考資料

（1）「宮崎の洋画百年展」　宮崎県立美術館

（2）「石井秀隣画業五十年展」　宮崎県立美術館